

第六章 折尾地区の研究開発拠点としての評価と展望

吉村 英俊、吉田 潔、岡 俊明

1. はじめに

北九州市が四大工業地帯の一つとして日本の近代化を担ってきたというのは、もはや遠い過去の歴史になっている。この北九州市が工業都市として繁栄していた時代、当地には全国から精鋭が集まり、多くの発明を生み出していた。また当時、全国初のアーケード商店街や焼きうどん・焼きカレーの発祥地として、工業分野に限らず、生活文化に至るまで初物を発信していた。しかし、エネルギー転換以降、製鉄や化学といった装置産業から家電や輸送機械といった加工組立産業へ産業構造が変わる中、北九州市は1980年代初頭、鉄冷えによる産業の衰退に伴い、多くの優秀な人材が域外へ流出し、単なる生産都市に変貌してしまった。

こういった状況にあって、北九州市は優秀な人材の流出に歯止めをかけ、さらに惹き付けるための対策を講じることになった。国の頭脳立地法を活用して「北九州テクノセンター」を設置（1990年）し、産学連携による新技術・新製品開発を推進した。また知的基盤の整備・充実が不可欠であるとの認識から、「北九州学術・研究都市整備構想」（1990）を策定し、2001年4月「北九州学術研究都市（以下学研都市）」が開設された。

学研都市には、北九州市立大学、九州工業大学大学院、早稲田大学大学院をはじめ、研究開発を志向する企業が集積しており、研究者の数は300名（2009年）を超えるなど、西日本有数の学術研究機関の集積を誇っている。また、この学研都市が立地する折尾地区には、以前から産業医科大学、九州共立大学、九州女子大学、九州女子短期大学が立地しており、市内で最も大学が集積するエリアである。

今後、北九州地域が発展していくためには、この折尾地区の研究学園集積を活かすことが不可欠である。折尾地区が知的創造拠点として、発明や付加価値を生み出すためには、それを担う創造力に富んだ人材を集積させなければならない。そしてそのためには、それら人材が働いてみたいと感じるような魅力的な街でなければならない。全国の多くのリサーチパークでは、これまで研究開発基盤の充実強化に対して多くの投資を行ってきたが、生活面に対しては、その重要性を認識しつつもあまり投資してこなかった。前章の調査結果によれば、アメリカ人は仕事よりも居住地を重視するという。また文化や芸術への欲求が高い。生活の質（Quality of Life）を高めることにより、研究開発基盤とのシナジー効果が生み出され、また逆に生活の質が低い地域では研究開発基盤を整備しても、実力を十分に発揮できない。

今回、この折尾地区の知的創造拠点力を高めるために、直接的な機能・環境である研究開発基盤と、間接的な機能・環境である生活面の2つの視点から、現状（ニーズ・評価）を把握し、今後の展望について検討する。

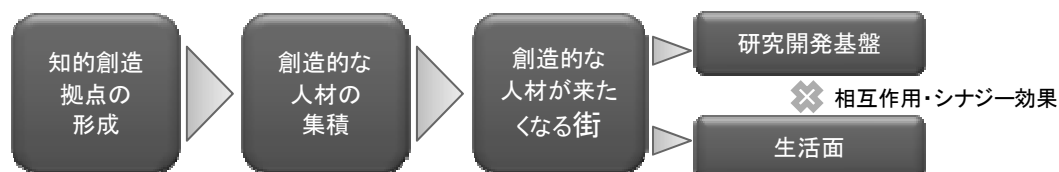


図6-1 知的創造拠点の形成

2. 調査要領

(1) 調査方法

折尾地区に立地する大学・大学院の教員及び研究スタッフ、北九州学術研究都市に立地する企業・研究機関に対して、アンケート調査（調査票：章末、調査期間：平成 22 年 1 月 8 日から 2 月 15 日まで）を行った。

なお、この時期は後期の定期試験や修士論文等の審査、入試準備などで、とくに大学教員においては多忙であるにもかかわらず、40%に上る高い回収率を得ることができた。これは折尾地区で働かれている方々の当該地区への強い思いや期待の表れであると考えられる。

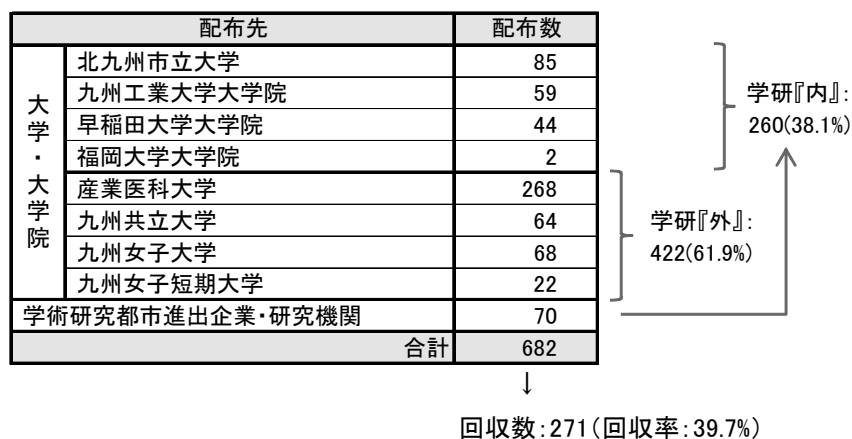


図 6-2 調査表の配布先と回収率

(2) 回答者の内訳

回答者の内訳は、年齢では 20 代が少なく(4%)、40 代が比較的多い(38%)。20 代が少なく、60 歳以上が比較的多いのは、回答者の多くが大学教員（後述）であることによるものである。また、性別では男性が多い(80%)。

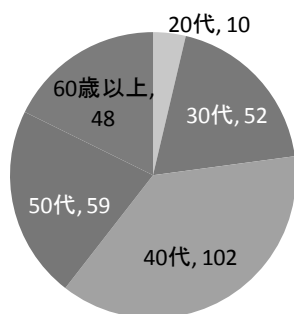


図 6-3 年齢の内訳

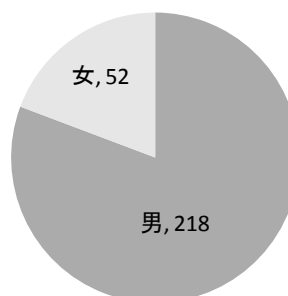


図 6-4 性別の内訳

職業では大学教員が 9 割近くを占める。なお、大学教員のうち、約 3 割が現在勤務している大学の卒業生である。勤務地では学研内が 40%、学研外が 55%となっており、調査票の配布数にほぼ比例している。また現在の勤務先での在職年数は、学研都市においては 2001 年に開設されて未だ 9 年しか経っていないこともあり、大半が 1 年以上 10 年未満である。一方、学研外では 10 年以上が過半数を超えている。

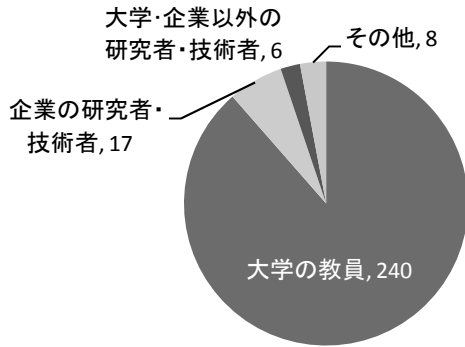


図 6-5 職業の内訳

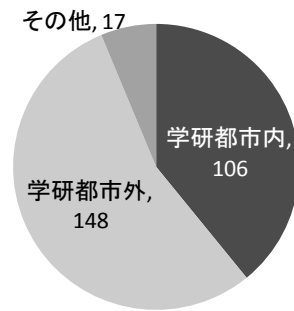


図 6-6 勤務地の内訳

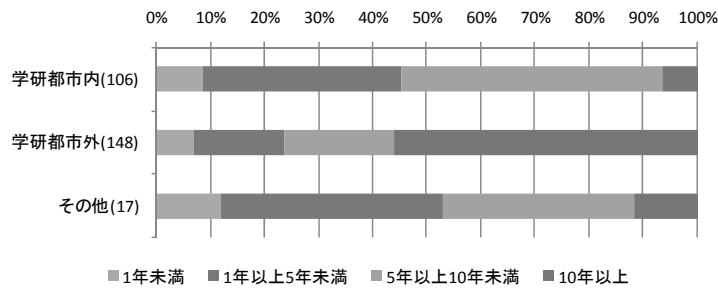


図 6-7 勤務地と在勤年数の関係

居住地では折尾地区が過半数を超える一方、福岡市及びその周辺地域も 20%に迫っている。福岡地域が多いのは、折尾駅まで博多駅から特急で 30 分と近いことに加え、例えば、北九州市立大学などにおいては前職が九州大学であった教員が比較的多いなどの要因が考えられる。なお、現在の居住地が出身地もしくは出身地の近くである者は 3 割を超える。

現在の居住地での居住年数において、とくに特徴的な傾向は見られない。また、勤務地と居住地との関係においても、学研内外で差異はない。

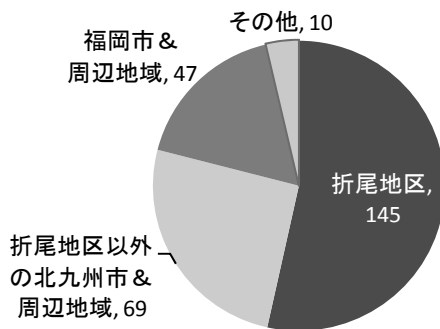


図 6-8 現在の居住地の内訳

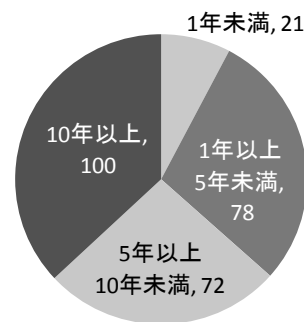


図 6-9 居住年数の内訳

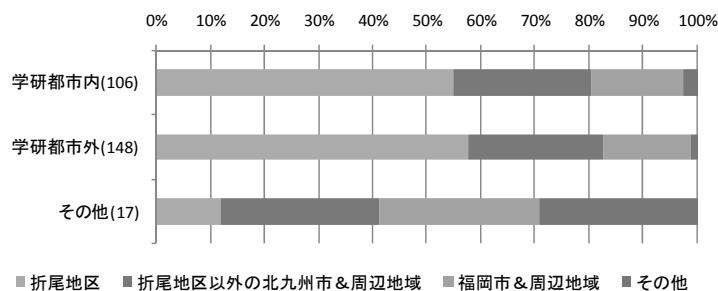


図 6-10 居住地と勤務地の関係

3. 調査結果

(1) 研究開発拠点としてのニーズ及び評価

① ニーズ

研究開発拠点として必要とされる機能・環境は、全国（第四章）と同様の傾向を示している。なお、各要素に高低はあるものの「理系の大学や研究機関、産業支援機関」や「研究者・技術者」「情報通信などのインフラ」といった研究開発の核となる要素を必要としている。一方、特徴的なのは「コスト」に関するニーズが小さいことであり、北九州地域の物価水準の低さを反映している。このことは立地促進に向け、折尾地区の強みとして大いに活用できる。

表 6-1 研究開発拠点としてのニーズ（折尾地区 vs. 全国）及び評価

	ニーズ			評価できる要素		評価できない要素	
	全 国	折尾地区		折尾地区		折尾地区	
	偏差値	度数	偏差値	度数	偏差値	度数	偏差値
理系大学、民間研究機関・公設試験研究機関、産業支援機関がある	63	186	75	60	58	8	39
法律や経済など文系の大学・学部がある	39	31	44	20	44	26	46
研究者・技術者・研究補助員の確保が容易である	61	119	62	30	48	55	58
事務員や生産要員などの確保が容易である	39	14	41	12	41	28	47
情報通信網などのインフラが整っている	75	119	62	72	63	19	43
顧客や他大学・事業所、行政機関などへのアクセスがよい	49	46	47	12	41	69	64
東京・大阪や国内主要都市などへのアクセスがよい	50	52	48	25	46	83	70
地価など、インシヤルコストが安い	49	13	40	57	57	9	39
賃料や水道光熱費など、ランニングコストが安い	47	14	41	34	49	9	39
補助金や低金利融資など、公的機関の資金支援が充実している	48	67	51	18	43	41	52
公的機関による共同研究先や取引先、人材紹介などの支援がある	46	45	47	26	46	44	54
自然の豊かさや静穏など研究開発向き環境がある	45	48	47	107	75	12	40
リサーチパークとしてのブランド、知名度が高い	40	31	44	7	39	59	60

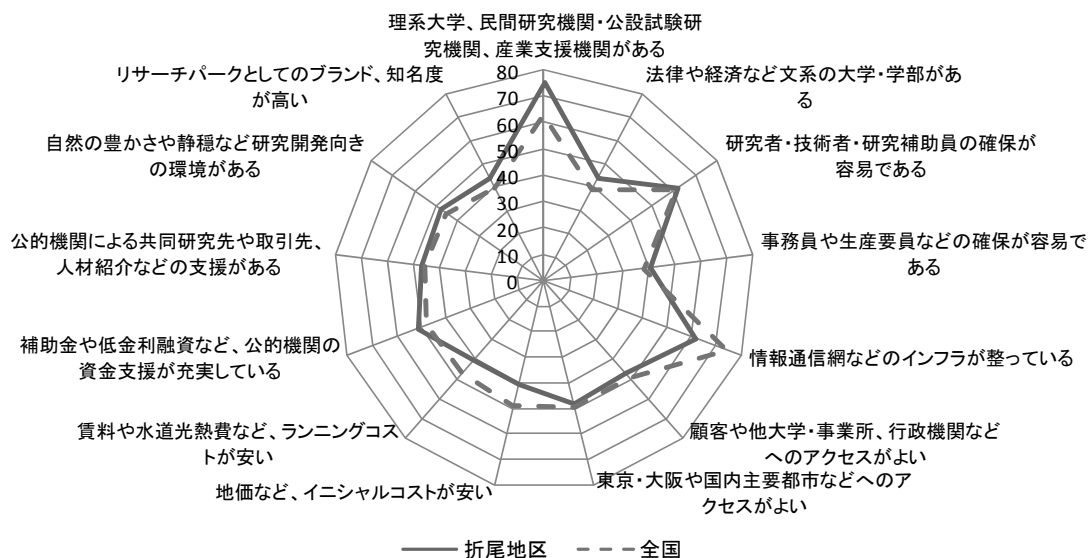


図 6-11 研究開発拠点としてのニーズ（折尾地区 vs. 全国）

ニーズを産学連携の視点から見てみると、産学連携を活発に行っている人ほど、「理系の大学や研究機関、産業支援機関」や「研究者・技術者」「情報通信などのインフラ」といった研究開発の核となる要素を重視しており、逆に「事務・生産要員」「リサーチパークとしての知名度」への関心はない。また数量化Ⅲ類分析によれば、産学連携を頻繁に実施している人は、産業支援機関等による資金や共同研究のコーディネートなどの支援を必要としている（計算結果：章末）。なお、産学連携は、学研内の大学・研究機関・企業の方が活発である。

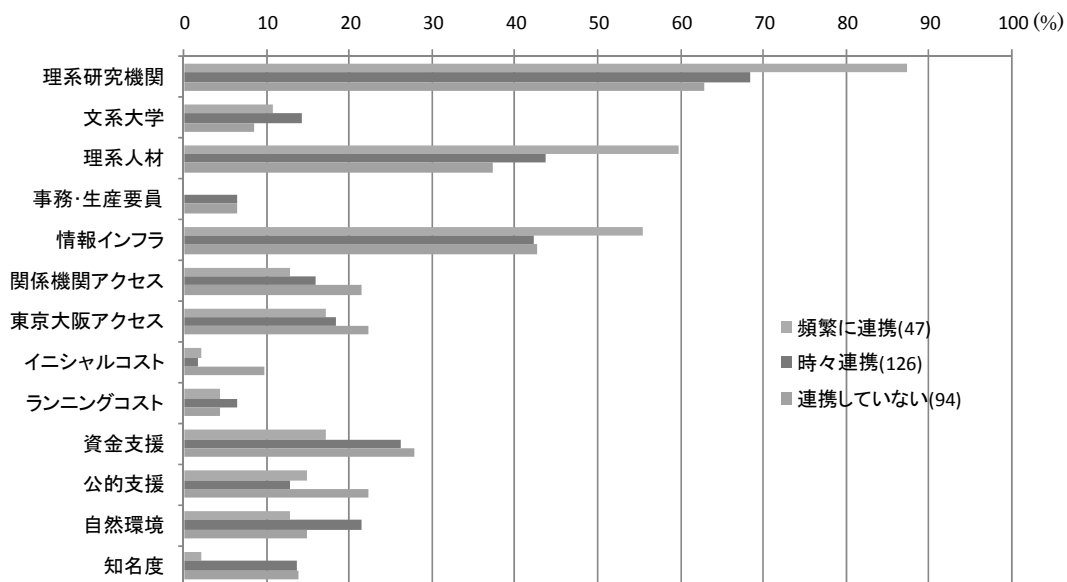


図 6-11 産学連携とニーズ（研究開発拠点）の関係

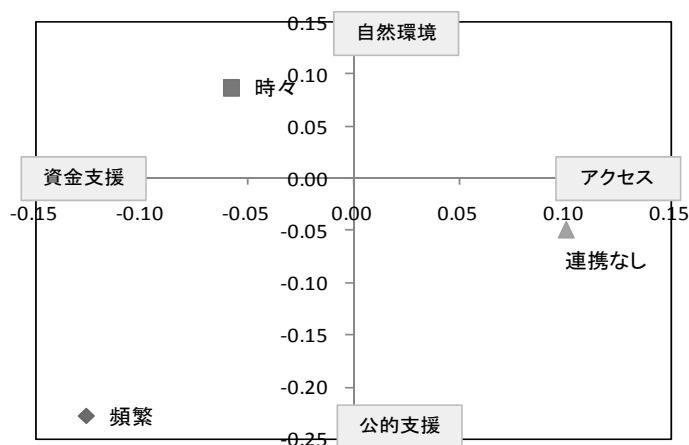


図 6-12 産学連携とニーズ（研究開発拠点）の関係（数量化Ⅲ類分析）

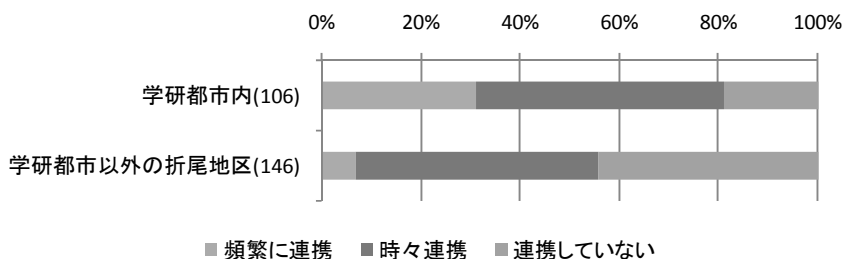


図 6-13 勤務地と産学連携の関係

勤務地との関係では、産学連携が活発な学研都市内において、「理系の大学や研究機関、産業支援機関の集積」「東京・大阪などへのアクセス」のニーズが高く、逆に学研都市外においては、文系学部を主軸とする九州共立大学や九州女子大学などの大学が立地することから、「文系大学・学部の集積」についてニーズが高くなっている。また数量化Ⅲ類分析によれば、学研都市内及び折尾（学研都市外）ともに原点近くに寄っており、「理系の大学や研究機関、産業支援機関の集積」や「情報通信インフラ」などの研究開発の核となる要素を重視している事が分かる（計算結果：章末）。

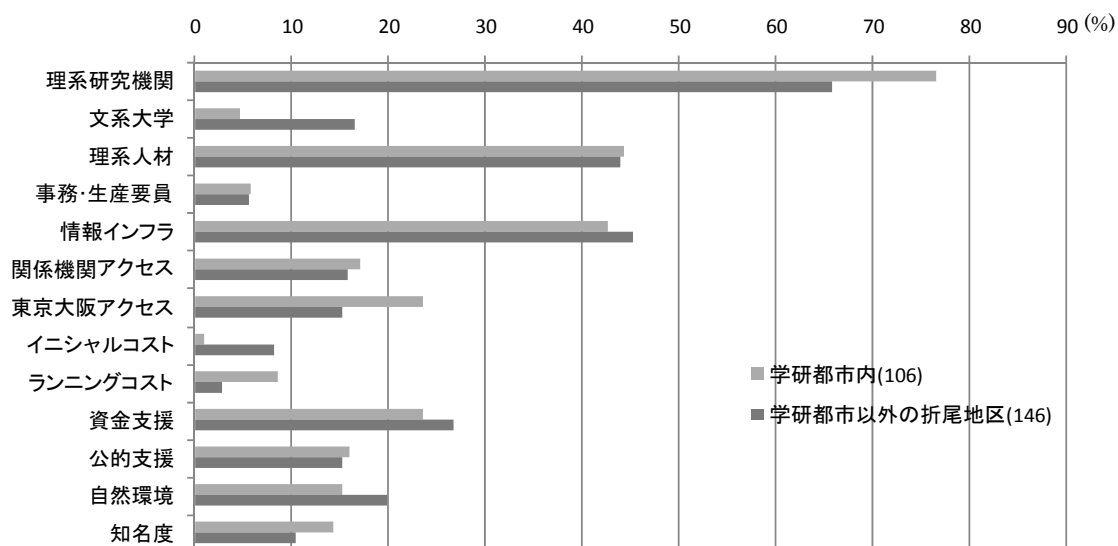


図 6-14 勤務地とニーズ（研究開発拠点）の関係

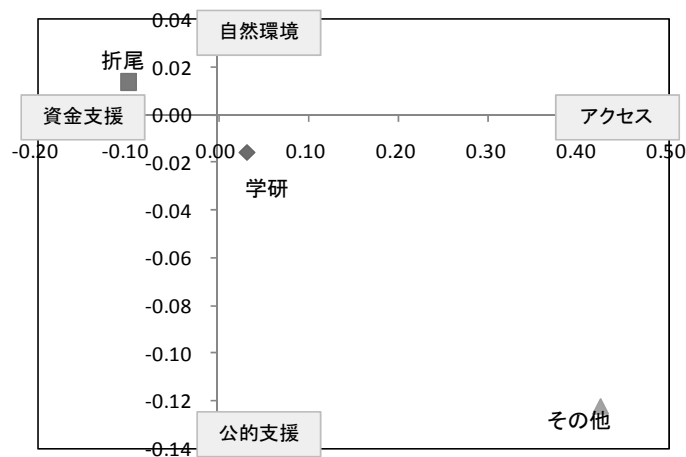


図 6-15 勤務地とニーズ（研究開発拠点）の関係（数量化Ⅲ類分析）

②評価

ニーズが高い研究開発の核となる要素のうち、「情報通信などのインフラ」については評価が高く、ニーズを満足していることが分かる。一方、「理系の大学や研究機関、産業支援機関」「研究者・技術者」については、相応の評価を得ているものの、ニーズを満足させるまでには至っていない。また、「コスト」及び「自然環境」については、ニーズが高くないにもかかわらず、評価は高く、地方の一般的な傾向ではないかと思われる。

研究者や技術者といった人材面において、今後努力が必要であるが、地方の、かつ後発のリサーチパークにあって、比較的健闘しているのではないかと思われる。とくに学研都市においては、インフラが整備され、かつ産業支援機関が適切にサポートしていることが分かる。

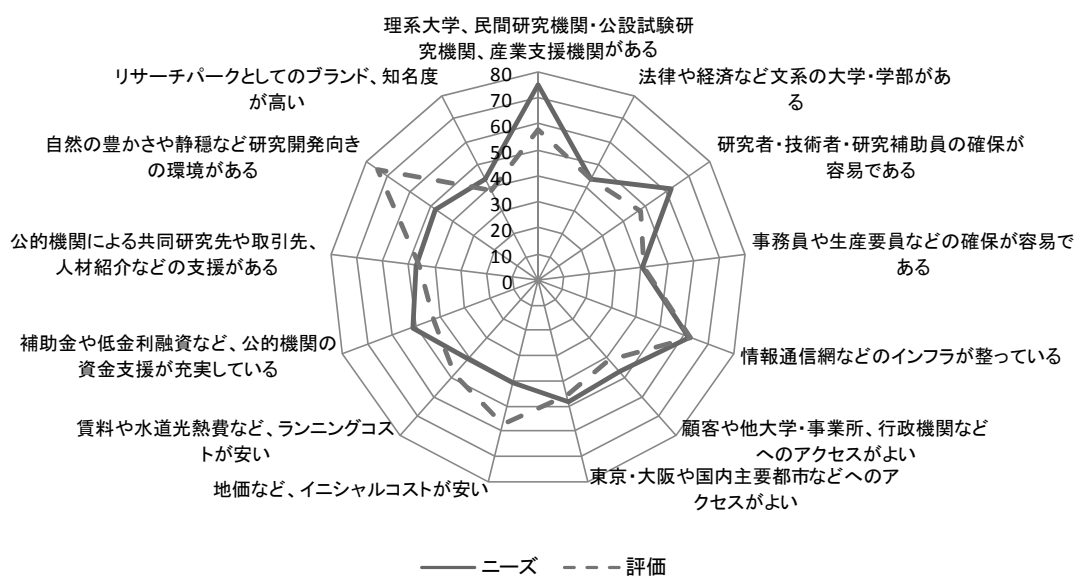


図 6-16 研究開発拠点としてのニーズと評価

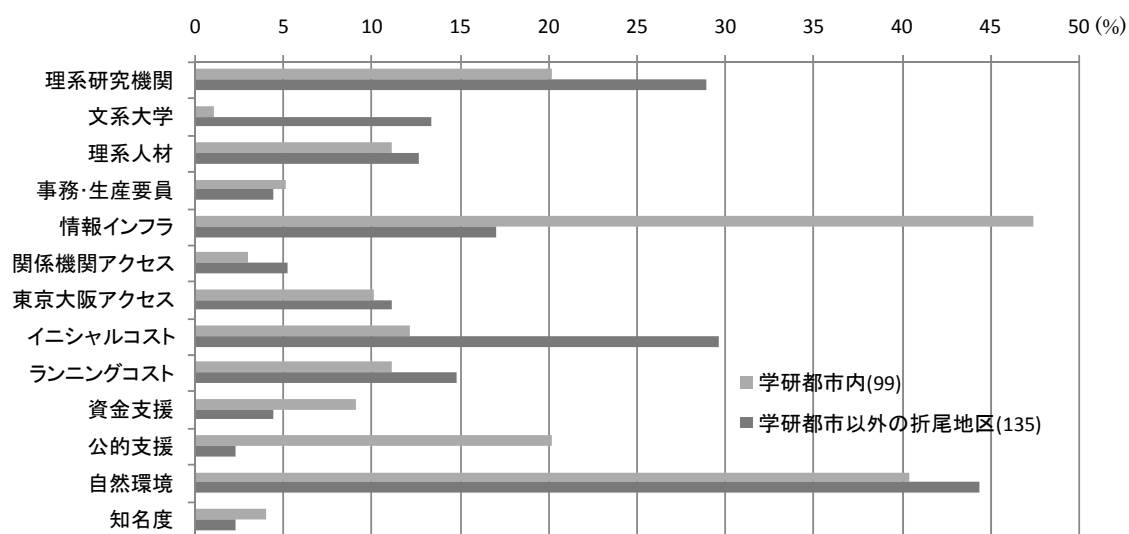


図 6-17 勤務地と評価（研究開発拠点）の関係

次に評価できない（非評価）要素についてみると、ニーズも高く、非評価も高い要素は研究者・技術者といった「理系人材の確保」である。さらに、ニーズはそれほど高くない（偏差値 50 前後）が、非評価が高い要素に顧客や他大学などの関係機関や東京・大阪など主要都市への「アクセス」が挙げられる。

なお、勤務地でみたとき、学術研究都市外において、情報通信などのインフラや資金をはじめとする公的支援への非評価が高く、行政機関のサポートが学術研究都市に集中していること、言い換えれば、学術研究都市外の大学において不満があることが分かる。

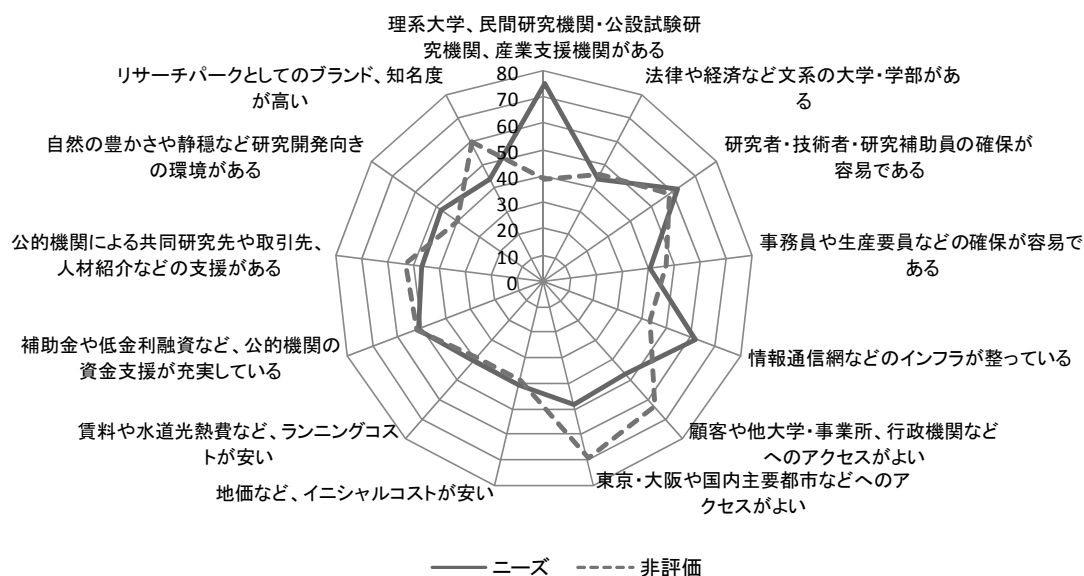


図 6-18 研究開発拠点としてのニーズと非評価

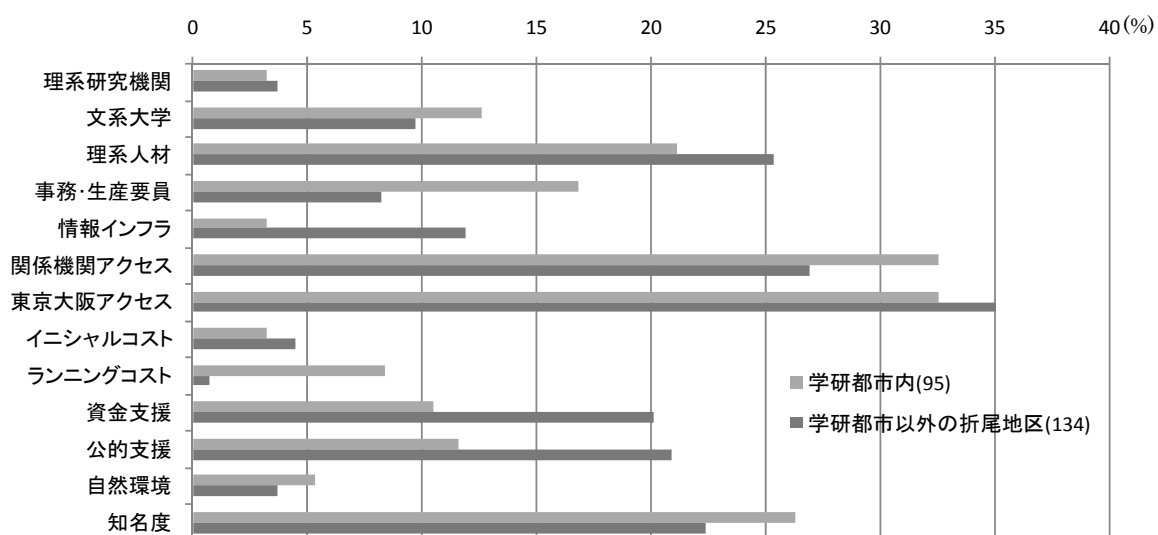


図 6-19 勤務地と非評価（研究開発拠点）の関係

(2) 生活面のニーズ及び評価

① ニーズ

生活面において必要とされる機能・環境は、前項の研究開発拠点と同様に、全国（第四章）と類似した傾向を示している。

ここで、全国同様に極めて高いニーズを示しているのが「鉄道やバスなどの公共交通」である。また、全国に比べてニーズが高い要素に「教育・文化施設」があり、逆に全国に比べてニーズが低い要素に「住宅」がある。地方であるが故に、良質かつ安価な住宅が比較的容易に確保できる反面、教育や文化・芸術に関わる施設やソフトが充実していないことが分かる。

なお、全国同様に「コミュニティ活動やボランティア活動」のニーズは低く、地域内の強い連帯を望んでいないといえる。

表 6-2 生活面におけるニーズ（折尾地区 vs. 全国）及び評価

	ニーズ				評価できる要素		評価できない要素	
	全国 偏差値	折尾地区		折尾地区		折尾地区		
		度数	偏差値	度数	偏差値	度数	偏差値	
行政機関や専門職事務所(例:弁護士、税理士)が近くにある	50	21	42	3	36	53	58	
外国人研究者や留学生にとって暮らしやすい環境がある	52	88	56	37	50	44	53	
教育・文化施設が充実している	57	158	70	34	49	48	55	
医療・子育て施設が充実している	55	90	56	35	49	27	45	
良質かつ安価な住宅を容易に確保できる	62	71	52	60	59	26	45	
自治会などのコミュニティ活動やボランティア活動が盛んである	38	13	41	15	41	19	41	
商業や娯楽施設、金融機関などが集積している	48	40	46	6	37	83	72	
鉄道やバスなどの公共交通が整備されている	74	165	71	33	48	57	60	
ゴミ処理や上下水道などのライフラインがしっかりしている	39	10	40	59	59	8	36	
自然が豊かであり、かつ静穏である	44	28	44	78	67	10	37	
街並みが整然とし、綺麗である	42	18	42	56	58	41	52	
生活コストが安い	50	40	46	65	62	18	41	
地域のイメージがよく、友人に住んでいるところを誇れる	39	42	46	6	37	46	54	



図 6-20 生活面のニーズ（折尾地区 vs. 全国）

ニーズを現在の居住地の視点からみると、折尾地区居住者において突出しているのは「医療・子育て施設」であり、量的改善が望まれる。ここで、福岡地域居住者において、やや特徴的な傾向が見られる。それは「教育・文化施設」へのニーズが低いこと、また「コミュニティ活動やボランティア活動」へのニーズが高いことであり、折尾地区を含む北九州地域よりも、一歩先んじた都会的な生活をすでに営んでいることがうかがえる。回答者の2割が福岡地域に住んでいる（前述）ことが、こういった点からも理解できる。また数量化Ⅲ類分析によれば、折尾地区居住者については、都市機能を重視しており、現在の不備具合がうかがえる。（計算結果：章末）。

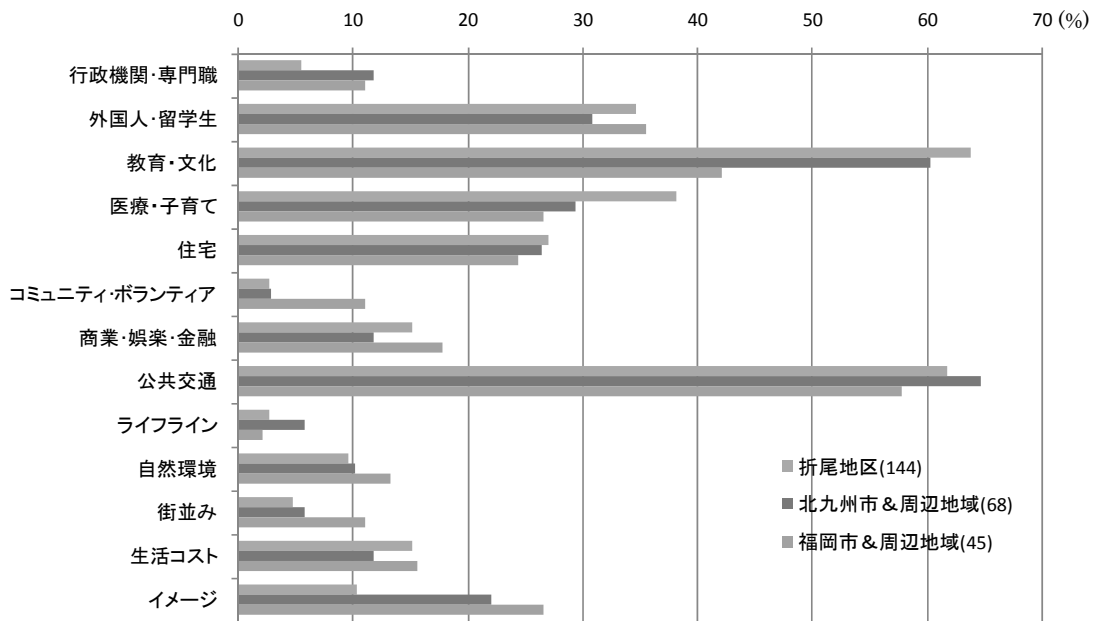


図 6-21 居住地とニーズ（生活面）の関係

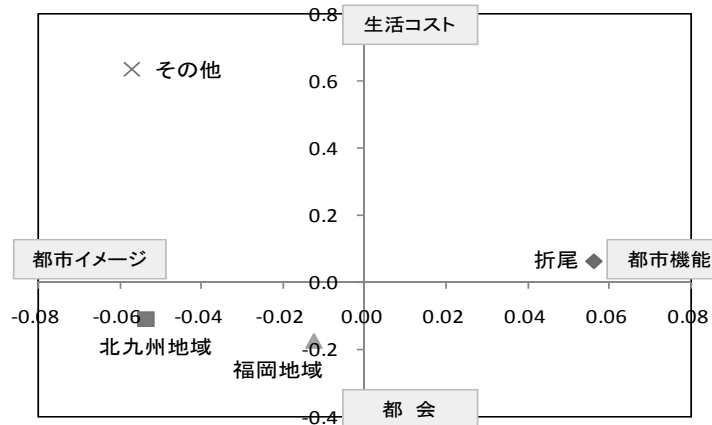


図 6-22 居住地とニーズ（生活面）の関係（数量化Ⅲ類分析）

勤務地との関係では、学研都市内の勤務者において「公共交通の整備」が著しく高く、早急に対策を講じる必要がある。また「商業・娯楽・金融機関の集積」が学研都市外に比べて高く、学研都市の都市機能の向上を図らねばならない。一方、学研都市外では「教育・文化」「医療・子育て」が高く、これは回答者が文系大学及び医科大学の教員であることに関係しているものと思われる。また数量化Ⅲ類分析によれば、学研都市内外のいずれの勤務者においても中央によっており、都市機能及び都市基盤の充実を期待していることが分かる。とくに学研都市内勤務者においては、商業・娯楽・金融機関といった都市機能への不足感が強い（計算結果：章末）。

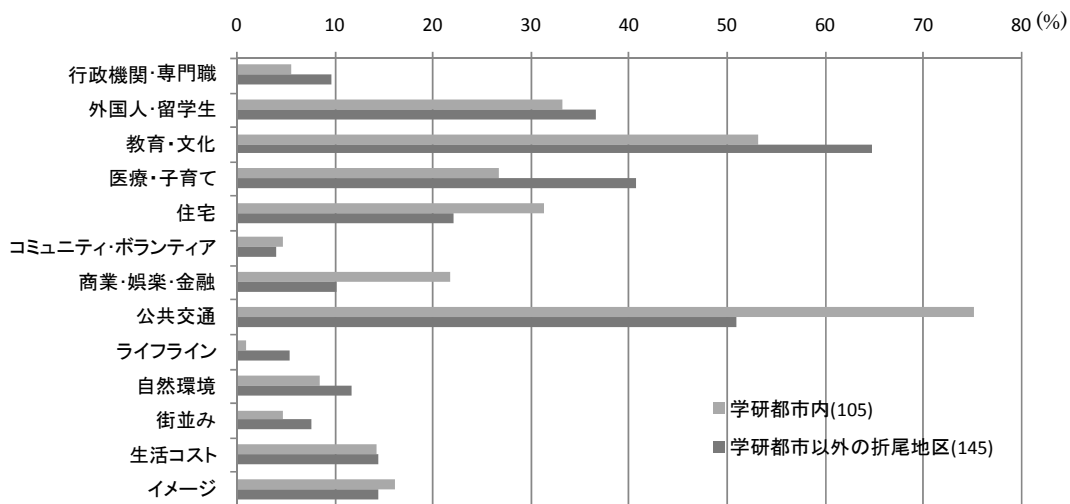


図 6-23 勤務地とニーズ（生活面）の関係

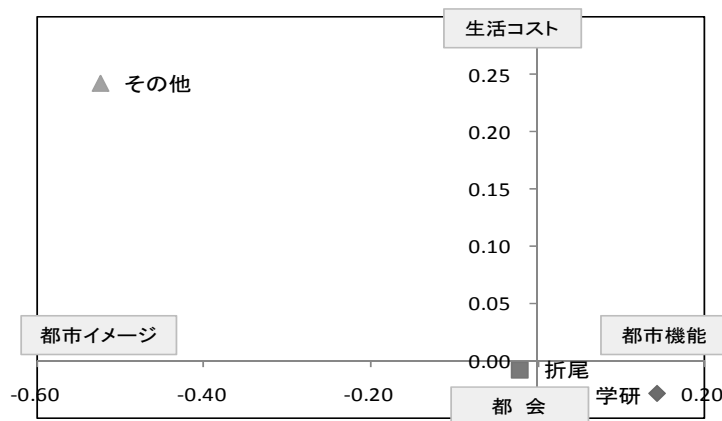


図 6-24 勤務地とニーズ（生活面）の関係（数量化Ⅲ類分析）

②評価

ニーズに対して評価が大きく下回る要素に「公共交通」「教育・文化施設」があり、早急に対応しなければならない課題であるといえる。逆に評価がニーズを大きく上回る要素に「自然環境」「ライフライン」「街並み」「生活コスト」があり、公共交通を除く都市基盤はしっかり整備されていることが分かる。しかし一方、「商業・娯楽・金融機関」「行政機関・専門職事務所」といった都市機能に関する要素については、評価がニーズを下回っており、改善しなければならないことが分かる。

勤務地の視点からみると、公共交通の問題は学研都市の課題であることが分かる。また学研都市においては、外国人や留学生への配慮、景観整備ができていているといえる。

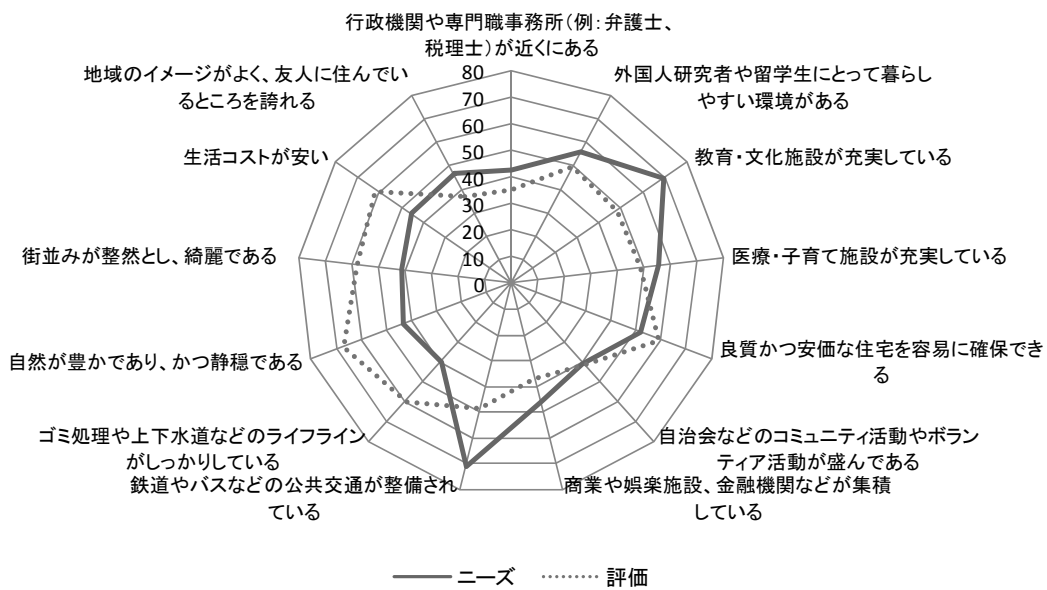


図 6-25 生活面のニーズと評価

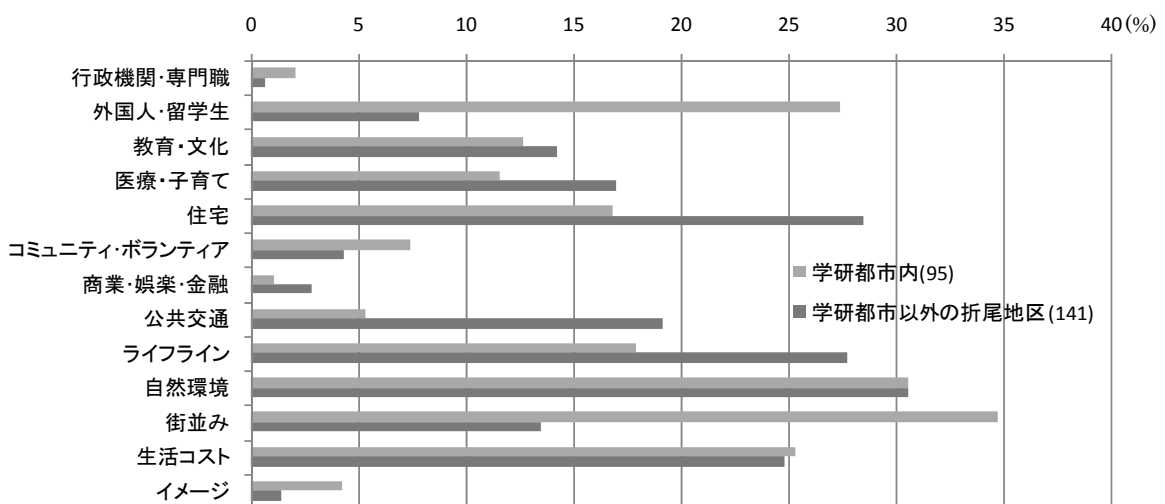


図 6-26 勤務地と評価 (生活面) の関係

次に評価できない（非評価）要素についてみると、前述の「商業・娯楽・金融機関」「行政機関・専門職事務所」といった都市機能に対しての非評価が高い。また「地域のイメージ」も良くないことが分かる。自由回答をみる限りでは、折尾駅周辺の治安を懸念する意見が比較的多かった。評価が高かった「街並み」については、非評価も高く、これは学研都市外の勤務者によるものである。また同様に、「外国人・留学生」についても、学研都市外の勤務者において非評価が高く、学研都市へ投資が集中している表れである。

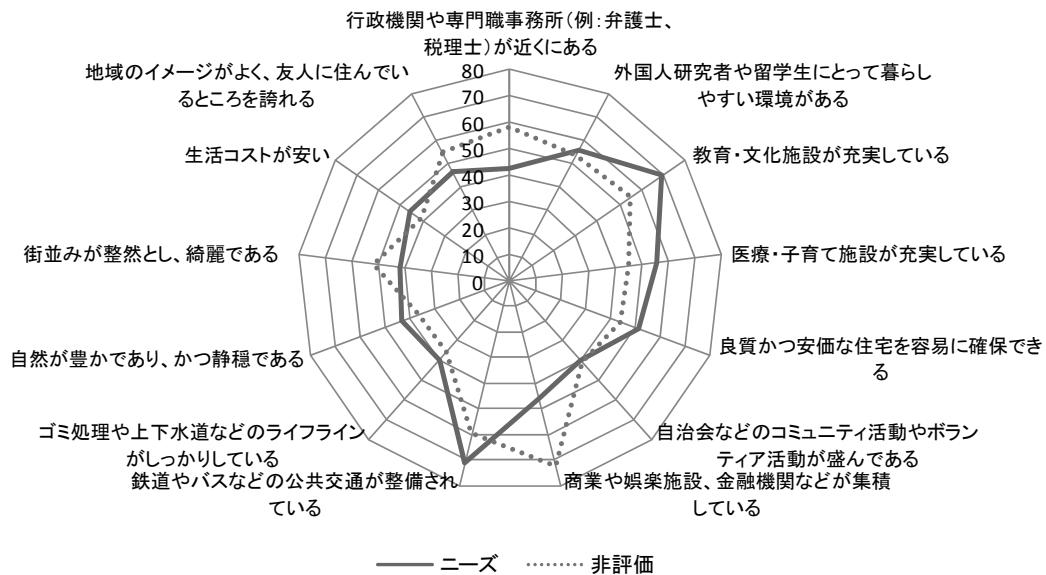


図 6-27 生活面のニーズと非評価

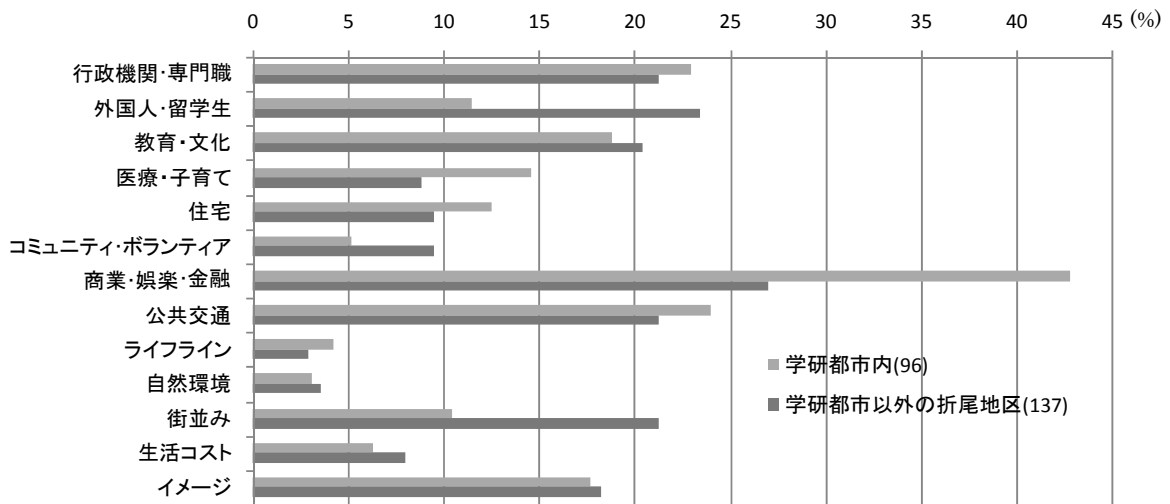


図 6-28 勤務地と非評価（生活面）の関係

(3) 自由記入の分析結果—テキストマイニング

①キーワードの出現数

キーワード出現数が多いのは、「折尾駅」「人・人材」「学研都市」「発展」「大学」「知的創造拠点」「交通機関」「環境」「地域」などとなっており、全体としては“学研都市としての強みを活かし、大学等の人材を活用して地域づくりを進めることで、折尾地区の知的創造拠点性を高めることが効果的である”と認識されているようだ。

また、折尾駅改修などを機とした交通機関の利便性の向上も求められている。

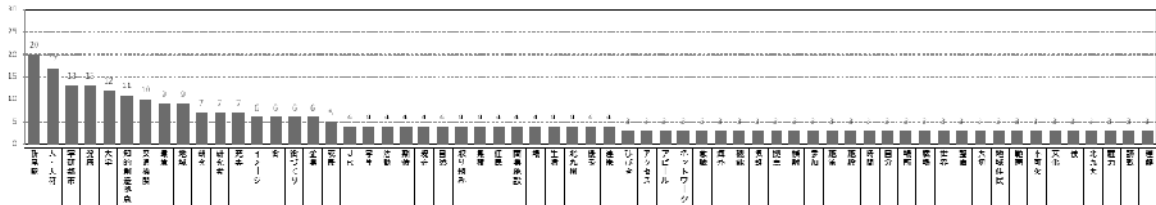


図6-29 キーワードの出現数（3件以上）

②キーワード解析

a. キーワード成分スコア

抽出されたキーワードに対して、多次元データ解析による成分抽出（分析の軸としての上位キーワードの抽出）を行った結果、意味性の高い成分スコア1、成分スコア2のスコア値が大きなものは下表のとおりとなる。

《成分スコア1に含まれる上位キーワード》

上位には「不可欠」「文化」「自分」「理解」「イメージ」などが含まれ、他のキーワードとの相関で推測すると、“地域の住民らが自分たちのまちの文化を理解し、地域の将来イメージを描いていくこと”の重要性に関する要素が表れている。

《成分スコア2に含まれる上位キーワード》

上位には「範囲」「整備」「拠点」「施策」「地域住民」などが含まれ、“拠点整備などで利便施設等の集積を図り、地域住民や学生にとって利用しやすい街を目指す施策を求める”要素が表れている。

表6-3 キーワード成分スコア（上位10ワード）

		キーワード変数の成分スコア値							
		成分スコア1		成分スコア2		成分スコア3		成分スコア4	
特徴が出ている成分 ↑	上位1	不可欠	0.9719	範囲	1.5869	整備	1.1616	連携	0.9319
	上位2	文化	0.9719	整備	0.7205	北九大	0.8589	整備	0.6721
	上位3	自分	0.84	拠点	0.6739	交通機関	0.5964	不可欠	0.4266
	上位4	理解	0.84	施策	0.6739	学研都市	0.359	文化	0.4266
	上位5	イメージ	0.8083	地域住民	0.6739	成長	0.3233	人材	0.3275
	上位6	拠点	0.7766	学生	0.6367	知的創造拠点	0.3162	取り組み	0.2751
	上位7	施策	0.7766	現在	0.6063	人材	0.3162	街	0.261
	上位8	地域住民	0.7766	集積	0.6063	環境	0.2761	学研都市	0.1946
	上位9	北九州	0.7753	街	0.4999	街	0.2618	環境	0.1925
	上位10	意識	0.6447	街づくり	0.4969	自分	0.2513	充実	0.1856
否定的成分 ↓	下位10	世界	-0.5163	アピール	-0.6336	魅力	-0.5408	研究者	-0.3487
	下位9	大学	-0.5534	参加	-0.6336	自然	-0.5784	学生	-0.4137
	下位8	連携	-0.6857	世界	-0.6336	アピール	-0.5942	期待	-0.4357
	下位7	ひびき	-0.7115	成長	-0.6368	参加	-0.5942	住民	-0.4576
	下位6	施設	-0.7115	研究	-0.6903	世界	-0.5942	優秀	-0.4576
	下位5	商業施設	-0.7267	活動	-0.7328	現在	-0.6112	検討	-0.5211
	下位4	充実	-0.837	場	-0.7328	集積	-0.6112	場所	-0.5211
	下位3	時間	-0.8435	生活	-0.7328	商業施設	-0.6185	大切	-0.5211
	下位2	住民	-0.9721	自分	-0.8523	ひびき	-0.6379	時間	-0.5503
	下位1	優秀	-0.9721	理解	-0.8523	施設	-0.6379	北九大	-0.8922

成分1が最も意味性の高い成分スコア軸

b. キーワード成分スコア布置図

成分スコア 1 と 2 に含まれるキーワードを座標軸上に布置し、各キーワード群の距離や位置、年代との位置関係をみた。

その結果、連携、住民などの語群の距離が近く、30代とも距離が近い。キーワードを含む回答例（表6-4）をみると、“知的創造拠点として大学の連携や学生と地域との交流促進によるまちの活性化”を求める声がみられる。

また、生活、成長、活動、文化などの語群が40代の周辺で比較的距離が近く、キーワードを含む回答例をみると、学研都市というイメージだけでなく、“働き、学ぶ人達が地域に溶け込み生活することで地域との結びつきも強くなる”という見方がなされており、ここでも地域と関係機関との交流の重要性が認識されている。

このほか、文化、北九州、不可欠、イメージなどの語群の距離が近く、キーワードを含む回答例をみると、“折尾地区が知的創造拠点として発展するためには、文化的な要素を伴わないと街としての魅力づくりにはつながらない”とする見方がなされている。現在、ネガティブなイメージで捉えられていると認識している人も少なくなく、文化的な魅力の向上を通じて街のイメージアップを図っていくことが重要とされている。

交通機関は60歳以上と距離が近く、高齢化の進展にともなう公共交通機関の充実ことが求められている

図6-30 キーワード成分スコア布置図

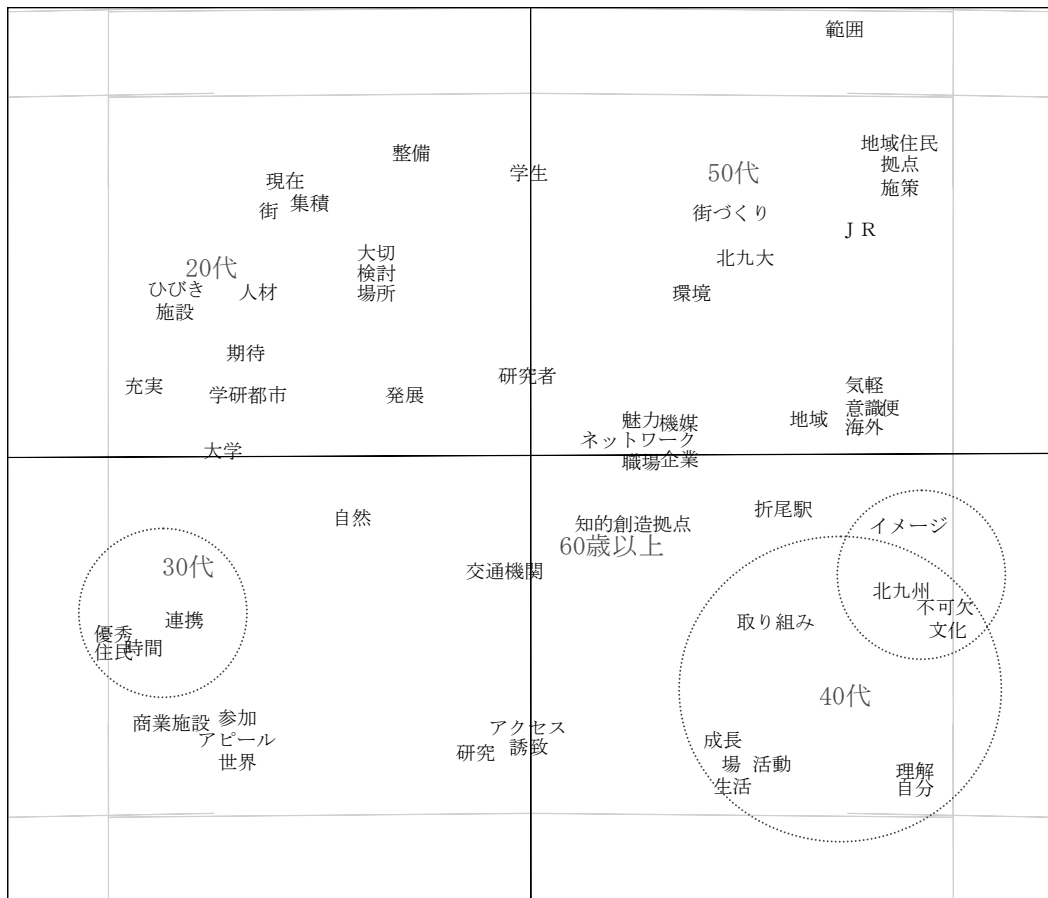


表 6-4 キーワードを含む回答例

意見	年代
折尾全体を知的創造拠点として発展させるのであれば、折尾駅周辺の整備、学研大通り周辺の大学と学研都市内の大学の連携、周辺高校との連携による小中高大学の総合的な学業関係を深く築き人材を集めること、また人を受け入れるだけの受け皿を作ることが必要かと思えます。	20代
折尾地区内の大学間の連携や協体制などをより充実させていくような取り組みが大切なのではないかと思います。学生交流や地域住民参加なども含めた大学間交流があれば参加していきたいと思えます。	30代
キャンパスの壁をとりさって、住民がキャンパス内を散歩できるような大学づくりと、空き家を利用したまちなか研究室を誘致するまちづくりも併せて必要です。	30代
住民のネットワークの充実が知的創造拠点を支える一つとなりうと思うので、(安全性等で)活動をアピールしたり、補助をできるようにすることも必要かと思えます。	30代
以前に比べると、学研都市付近は各種施設も出来、住みやすくなったと思えますが、より発展するには、商業施設をはじめ、行政関係や金融機関などが集積することを望みます。	30代
仕事帰りや休日立ち寄れる様な商業施設や文化施設がもつとあれば、人も集まり、折尾自体も発展していくと思うのですが。仕事への意欲、活力につながる街づくりを期待しています。	30代
実際、僕自身はそういう立場になったのですが、実感として女性もそうですが、生活のインフラがとてつもないのを実感しています。そういうアピールを各方面にしかけるのはどうでしょう	30代
また、コミュニティーFMで地元への発信を行っているのですから、PodCastなどで、世界への発信も同時に行き知名度を上げるのはいかがでしょう。サイエンスカフェも小倉等で定期的に行き、一般の方にも知ってもらおうと良いと思えます。	30代
優秀な研究者を集めて、世界に発信できる研究を行っていくことが、最終的には成長・発展につながるのではないのでしょうか？ 優秀な研究者を集めて、世界に発信できる研究を行っていくことが、最終的には成長・発展につながるのではないのでしょうか？必要でしょう。	30代
折尾地区で研究・その他でがんばる人が折尾に住居を構えなければ、成長・発展はないと思えます。私は仕事以外で自分の住居地区を盛り上げるためにボランティアその他の活動を行っています。	40代
学研都市、というイメージを地域に定着させること(まだ十分に理解されているとは言い難い)。そのために、地域住民が気軽に 利用しやすいコミュニティー空間をできるだけ多く作っていくこと。地域産業の発展に寄与するために、工学系の知的拠点であることが重要であると言えるが、それと併せて文化・芸術の活動 も必要である。できれば、北九州地区の実状に合った文化・芸術活動を行うことが望ましい。	40代
何となく暗いイメージはあるものの、地価や生活にかかる費用も格段に安いことをアピールする必要はあると思えます。	40代
「折尾」という地域・名前は福岡以外の人にはほとんど知られていないと思えます。やはり、何らかの魅力がないと人を引きつけることはできず、地域の活性化がなければ、知的創造拠点としての発展はあまり望めないでしょう。国内外の研究者を引きつけられる街づくりを考えてほしい。	50代
知的創造を高める為には文化の発展が不可欠だと思えます。そのためには、演劇場や博物館、美術館といった文化施設、地域住民の健康づくりから、プロスポーツ競技まで実施できる体育・スポーツ施設もこの折尾地区に必要なと考えています。また、折尾地区は全国でも有数の犯罪多発地域です。イメージだけでなく安心して住める社会環境づくりをしていかなければならないと思えます。	50代
アプローチするシステムが折尾地区に構築されれば、知的創造拠点として一層成長・発展するのではないかと。このためには、各大学のプレーンを同じ土俵に上げて、コーディネートするスタッフが、公的機関より派遣されるとやりやすいように思う。	60歳以上
在住地域の組織で高齢化が進んでいるため、バス路線の延長ならびに乗り入れを申請し活動・実践しています。住民の便宜性だけでなく、知的創造拠点として成長・発展していくためには、交通機関の充実が重大な事と考えます。市の方にも申請し、検討していただいています。是非このアンケートの主旨からも切にお願いしていただきたく思っています。	60歳以上

4. 今後の展望

(1) 課題の整理

ここでは、まず調査結果をニーズと評価の観点から整理し、さらに課題の絞り込み（ターゲットィング）を行うことにする。

研究開発拠点の視点、生活面の視点の両方において、課題とされるのは「アクセス（公共交通）」であり、とくに学研都市勤務者において深刻である。また研究開発拠点の視点では、研究者や技術者といった「研究に携わる人材」が満たされておらず、生活面においては教育・文

化、医療・子育てといった「都市機能」が十分でない。さらに学研都市と学研都市外（表内：折尾）では、評価に差異があり、資金やコーディネートといった「公的機関による支援」、「外国人教員や留学生に対する環境整備」「街並み整備」などにおいて、学研都市内の方が評価が高い。これは行政機関によるこれまでの投資の成果といえるが、一方、このことは同じ折尾地区にあって、研究学園都市としての一体化を阻害する要因にもなると思われる。

なお、ネガティブな要因のみならず、ポジティブな要因もある。例えば、「生活コスト」が低いことであり、その結果、回答者においては「住宅」を含めてニーズ（関心）が低くなっている。以上のことを踏まえて、全国との比較を大雑把に行うと、表6-6のようになる。

表6-5 課題の絞り込み（ターゲティング）

	ニーズ 『高い』	評価		ニーズ 『中位』	評価		ニーズ 『低い』	評価	
		学研	折尾		学研	折尾		学研	折尾
研究開発拠点	研究開発基盤			アクセス		×	コスト		○
	・大学・研究所		○	支援					
	・研究者・技術者		△	・資金	△	×			
	・情報通信インフラ	◎	△	・コーディネート	○	△			
生活面	教育・文化		△	外国人・留学生	○	×	行政機関・専門職		△
	公共交通	×	△	医療・子育て		△	コミュニティ活動		△
				住宅	△	○	ライフライン		○
							街並み	○	△

表中：◎評価が著しく高い、○高い、△低い、×著しく低い

表6-6 全国との比較

	全国	折尾地区
共通の課題	アクセス 研究開発人材	
強み		生活コスト
弱み		都市機能 (とくに教育・文化)

(2) 充実強化の方向

① 公共交通の整備と都市機能の充実

JR 折尾駅を起点にしたバスによるアクセスの円滑化と、JR 折尾駅近くの都市機能の充実が最低限必要である。このことにより、当地を避けていた人材を惹き付けることができるのではないかと考える。なお、バスにおいては当然収益性に配慮しなければならないことから、ワンボックスカー（例：百貨店が駐車場との送迎に使用）を使用するなど、柔軟な対応が必要である。また資金支援が必要ならば、行政機関が所管している研究開発助成制度による成果の一部を補助金として活用するのも一考である。JR 折尾には特急が停車することから、博多・小倉へ比較的短時間で行くことができ、JR 折尾駅の起点性を高めることにより、東京や大阪へのアクセスも改善される。

都市機能については、JRの駅が起点になるように多機能で洗練された複合ビルにすることが望まれる。行政機関や商業施設、金融機関などが入居し、ワンストップサービスを提供するとともに、集いの場として機能することが期待される。なお、第五章の「就業及び居住に関する国際比較」でも示唆したとおり、折尾地区で働く創造的な人材は、今後、文化や芸術に対して欲求を高めていくものと予想され、アーティスティックな雰囲気醸し出す施設やエリア、仕掛け（例：アートスペース、文化村）を作っていくことが必要である。学生やアーティストが屯する場があるべきである。

②折尾地区の学術研究機関の一体化

行政は学研都市に投資を集中しているが、今後は折尾地区全体を学術研究都市として、ハード&ソフト両面から整備しなければならない。工科系だけではプラスチックな感じが拭えず、文系の九州共立大学や九州女子大学、医系の産業医科大学、教員養成する九州女子短期大学などが緩やかに連携することで、多様性を醸し出し、真の学術研究都市なるものとする。いろいろな大学があるのに、交流しないのは宝の持ち腐れである。

市内において人を惹き付けることが出来る地域はそんなにない。観光客ならば、門司港レトロである。21世紀の知識情報社会において、その担い手は創造的な人材“Creative Class”であるといわれている。この創造的な人材を大規模に集客できる地域はここ折尾しかない。この地域を一体的に開発し運用することで、西日本有数の「知るつぼ“Melting Pot”」にすることが可能である。

現在、JR折尾駅周辺は八幡西区、学研都市は若松区になっており、行政区が異なるため、一体的な街づくりができ難い状況になっている。そこで例えば「折尾区」をつくってはどうか。八幡西区や若松区に統合することも考えられるが、独自性を出すためには、独立した行政区が妥当である。

③新旧折尾の融合

折尾地区には、北九州工業地帯の一翼を担ってきた古い折尾と研究学園都市にみる新しい折尾がある。このとき古い折尾をどのように処遇するかが課題である。留意しなければならないことは、研究学園都市に縁があって来ている人と、従来からの住民とは、街に対しての想いが異なることである。とくに前者にとって、古い折尾が持つ遺産は不可欠なものではないと思われる。

知的創造拠点としての新しい折尾を基軸に発展していくべきであり、通勤者や転入者の当地への帰属（地元）意識を向上させるために、文化・芸術やコミュニティ活動に対して、古い折尾を活かすことが賢明であると思われる。

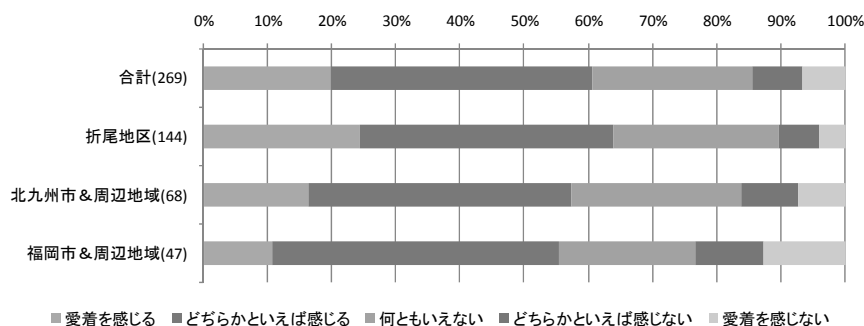


図6-31 居住地と折尾への愛着の関係

〔資料 I〕 調査票

1. 年齢についてお答え下さい。

- ①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60歳以上

2. 性別についてお答え下さい。

- ①男性 ②女性

3. 現在の職業についてお答え下さい。

- ①大学の教員 ②企業の研究者もしくは技術者 ③①②以外の研究者もしくは技術者 ④その他

4. 現在の勤務地についてお答え下さい。

- ①北九州学術研究都市内 ②北九州学術研究都市以外の折尾地区 ③その他

5. 上記3で①大学の教員とお答えになった方にお尋ねいたします。現在の勤務先と出身大学との関係についてお答えください。

- ①現在の勤務先は、出身大学である ②出身大学がそんなに遠くないところにある
③出身大学とは無関係であり、何らかの縁があって折尾地区にきた ④その他

6. 現在の勤務地と出身地の関係についてお答え下さい。

- ①現在の勤務地は、出身地である ②出身地に比較的近い
③出身地とは無関係であり、何らかの縁があって折尾地区にきた ④その他

※ここで出身地とは、出生地ではなく、高校卒業までの18年間で最も思い出深いところをいいます。

7. 現在の勤務地で働いている年数についてお答え下さい。

- ①1年未満 ②1年以上5年未満 ③5年以上10年未満 ④10年以上

8. 現在の居住地についてお答え下さい。

- ①折尾地区 ②折尾地区以外の北九州市及びその周辺地域（例、直方市）
③福岡市及びその周辺地域（例、古賀市） ④その他

※折尾地区はJR折尾駅周辺に限らず、学術研究都市や浅川・青葉台といった後背地を含む地域とします。

9. 現在の居住地にお住まいの年数についてお答え下さい。

- ①1年未満 ②1年以上5年未満 ③5年以上10年未満 ④10年以上

10. リサーチパークといった研究開発拠点に必要な機能及び環境についてお答え下さい。（3つまで）

- ①理系大学・研究機関や公設試、産業支援機関がある
②法律や経済など文系の大学・学部がある
③研究者・技術者・研究補助員の確保が容易である
④事務員や生産要員などの確保が容易である
⑤情報通信網などのインフラが整っている
⑥顧客や他大学・事業所、行政機関などへのアクセスがよい
⑦東京・大阪や国内主要都市などへのアクセスがよい
⑧地価など、イニシャルコストが安い
⑨賃料や水道光熱費など、ランニングコストが安い
⑩補助金や低金利融資など、公的機関の資金支援が充実している
⑪公的機関による共同研究先や取引先、人材紹介などの支援がある
⑫自然の豊かさや静穏など研究開発向きの環境がある
⑬リサーチパークとしてのブランド、知名度が高い
⑭その他

11. 研究開発拠点としての折尾地区について、評価できる機能・環境を上記 10 の選択肢から3つ選んで下さい。
とくに評価できるもの → 評価できるもの →
12. 研究開発拠点としての折尾地区について、評価できない機能・環境を上記 10 の選択肢から3つ選んで下さい。
とくに評価できないもの → 評価できないもの →
13. あなたの勤務先は、折尾地区の大学や研究機関、企業等（但し、産業支援機関を除く）と研究などにおいて連携していますか。
①頻繁に連携している ②時々（必要に応じて）連携している ③連携していない
14. 折尾地区が、研究開発拠点として発展していくために必要な生活面の機能及び環境についてお答え下さい。（3つまで）
①行政機関や専門職事務所（例：弁護士）が近くにある
②外国人研究者や留学生にとって暮らしやすい環境がある
③教育・文化施設が充実している
④医療・子育て施設が充実している
⑤良質かつ安価な住宅を容易に確保できる
⑥自治会などのコミュニティ活動やボランティア活動が盛んである
⑦商業や娯楽施設、金融機関などが集積している
⑧鉄道やバスなどの公共交通が整備されている
⑨ゴミ処理や上下水道などのライフラインがしっかりしている
⑩自然が豊かであり、かつ静穏である
⑪街並みが整然とし、綺麗である
⑫生活コストが安い
⑬地域のイメージがよく、友人に住んでいるところを誇れる
⑭その他（
15. 折尾地区の生活面の機能及び環境について、評価できる機能・環境を上記 14 の選択肢から3つ選んで下さい。
とくに評価できるもの → 評価できるもの →
16. 折尾地区の生活面の機能及び環境について、評価できない機能・環境を上記 14 の選択肢から3つ選んで下さい。
とくに評価できないもの → 評価できないもの →
17. 折尾地区に愛着を感じますか。
①愛着を感じる ②どちらかといえば感じる ③何ともいえない
④どちらかといえば感じない ⑤愛着を感じない
18. 折尾地区が、知的創造拠点として成長・発展していくためにはどうしたらよいのか、忌憚のないご意見をお聞かせ願います。

〔資料Ⅱ〕 数量化Ⅲ類分析 — 研究開発拠点として必要な機能・環境

まず、カテゴリースコアを求めるにあたり、単純集計値が小さい（31 以下、サンプル数 N=271 の 12%未満）カテゴリーを分析の対象から除外した。具体的には、「文系大学」「事務・生産要員」「イニシャルコスト」「ランニングコスト」「知名度」の 5 項目である。次に、1 軸から 3 軸までのカテゴリースコアを算出した。各軸の相関係数はいずれも 0.5 を超えるものの、累積寄与率は 3 軸までで 50.6%と高くなく、各人が必要とする機能や環境は多様であり、類似性を見出すことが難しいことが分かる。なお、このことを前提にしつつ、1 軸と 3 軸（累積寄与率 33.5%）を対象に基本特性の抽出（軸の解釈）を行うことにした。

表 6-7 カテゴリーとその単純集計値（研究開発拠点）

カテゴリー名	質問内容	度数
理系研究機関	理系大学、民間研究機関・公設試験研究機関、産業支援機関がある	186
文系大学	法律や経済など文系の大学・学部がある	31
理系人材	研究者・技術者・研究補助員の確保が容易である	119
事務・生産要員	事務員や生産要員などの確保が容易である	14
情報インフラ	情報通信網などのインフラが整っている	119
関係機関アクセス	顧客や他大学・事業所、行政機関などへのアクセスがよい	46
東京大阪アクセス	東京・大阪や国内主要都市などへのアクセスがよい	52
イニシャルコスト	地価など、イニシャルコストが安い	13
ランニングコスト	賃料や水道光熱費など、ランニングコストが安い	14
資金支援	補助金や低金利融資など、公的機関の資金支援が充実している	67
公的支援	公的機関による共同研究先や取引先、人材紹介などの支援がある	45
自然環境	自然の豊かさや静穏など研究開発向きの環境がある	48
知名度	リサーチパークとしてのブランド、知名度が高い	31

表 6-8 カテゴリースコア（研究開発拠点）

カテゴリー名	1 軸	2 軸	3 軸
理系研究機関	-0.278050	-0.241009	-0.371141
理系人材	-0.507607	0.310214	-0.649688
情報インフラ	-0.313071	-0.371486	0.288117
関係機関アクセス	-0.844867	-2.104085	2.368221
東京大阪アクセス	1.543642	1.836365	1.745416
資金支援	0.704428	-0.398387	-1.606067
公的支援	-1.476570	2.316773	0.392471
自然環境	2.650448	-0.503063	0.048016

表 6-9 寄与率及び相関係数（研究開発拠点）

軸 No.	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
1	0.3767	18.0%	18.0%	0.6137
2	0.3605	17.2%	35.1%	0.6004
3	0.3250	15.5%	50.6%	0.5700

【1軸の解釈】

カテゴリースコアの正の方向では、「自然環境」「東京大阪アクセス」が高い値を示しており、「自然環境」とする。一方、負の方向では、「公的支援」「関係機関アクセス」が高い値を示しており、「公的支援」とする。

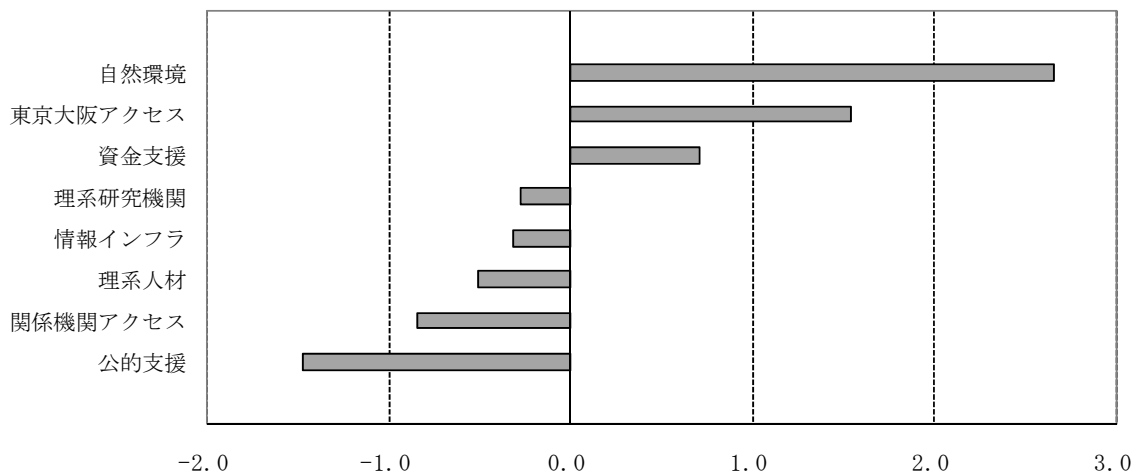


図 6-32 1軸のカテゴリースコア（研究開発拠点）

【3軸の解釈】

カテゴリースコアの正の方向では、「関係機関アクセス」「東京大阪アクセス」が高い値を示しており、「アクセス」とする。一方、負の方向では、「資金支援」が突出しており、「資金支援」とする。

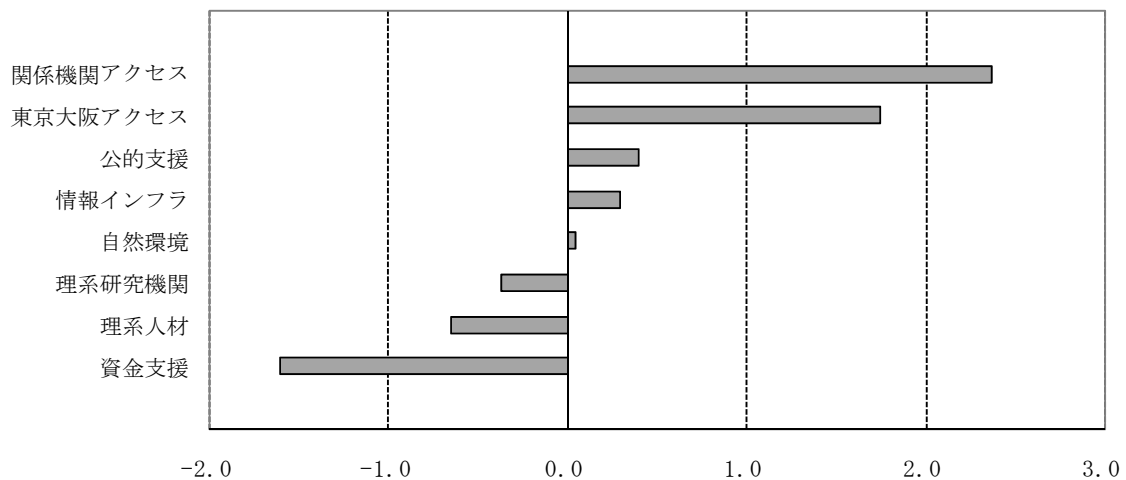


図 6-33 3軸のカテゴリースコア（研究開発拠点）

以上より、折尾地区における研究拠点として必要とされる機能・環境は、「自然環境」「アクセス」「公的支援」「資金支援」の4つの成分に分類することができる。

〔資料Ⅲ〕 数量化Ⅲ類分析 ―生活面において必要な機能・環境

前項の研究拠点と同様に、まずカテゴリースコアを求めるにあたり、単純集計値が小さい（28 以下、サンプル数 N=271 の約 10%）カテゴリーを分析の対象から除外した。具体的には、「行政機関・専門職」「コミュニティ・ボランティア」「ライフライン」「自然環境」「街並み」の 5 項目である。次に、1 軸から 3 軸までのカテゴリースコアを算出した。各軸の相関係数はいずれも 0.5 を超えるものの、研究拠点同様に、累積寄与率は 3 軸までで 54.6%と高くなかった。なお、ここでは 1 軸と 3 軸（累積寄与率 36.9%）を対象に基本特性の抽出（軸の解釈）を行うことにした。

表 6-10 カテゴリーとその単純集計値（生活面）

カテゴリー名	質問内容	度数
行政機関・専門職	行政機関や専門職事務所（例：弁護士、税理士）が近くにある	21
外国人・留学生	外国人研究者や留学生にとって暮らしやすい環境がある	88
教育・文化	教育・文化施設が充実している	158
医療・子育て	医療・子育て施設が充実している	90
住宅	良質かつ安価な住宅を容易に確保できる	71
コミュニティ・ボランティア	自治会などのコミュニティ活動やボランティア活動が盛んである	13
商業・娯楽・金融	商業や娯楽施設、金融機関などが集積している	40
公共交通	鉄道やバスなどの公共交通が整備されている	165
ライフライン	ゴミ処理や上下水道などのライフラインがしっかりしている	10
自然環境	自然が豊かであり、かつ静穏である	28
街並み	街並みが整然とし、綺麗である	18
生活コスト	生活コストが安い	40
イメージ	地域のイメージがよく、友人に住んでいるところを誇れる	42

表 6-11 カテゴリースコア（生活面）

カテゴリー名	1 軸	2 軸	3 軸
外国人・留学生	-0.307606	-0.946425	1.830212
教育・文化	-0.183388	-0.697517	-0.126485
医療・子育て	-0.090398	-0.877938	-0.895772
住宅	1.509993	0.093862	-0.449188
商業・娯楽・金融	-1.134178	2.625965	1.835954
公共交通	-0.118618	0.234886	-0.086638
生活コスト	2.689181	1.636873	-0.055659
イメージ	-2.039461	1.346993	-2.035206

表 6-12 寄与率及び相関係数（生活面）

軸 No.	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
1	0.4422	21.5%	21.5%	0.6650
2	0.3620	17.6%	39.2%	0.6017
3	0.3169	15.4%	54.6%	0.5629

【1軸の解釈】

カテゴリースコアの正の方向では、「生活コスト」「住宅」が突出しており、「生活コスト」とする。一方、負の方向では、「イメージ」「商業・娯楽・金融」が高い値を示しており、「都会」とする。

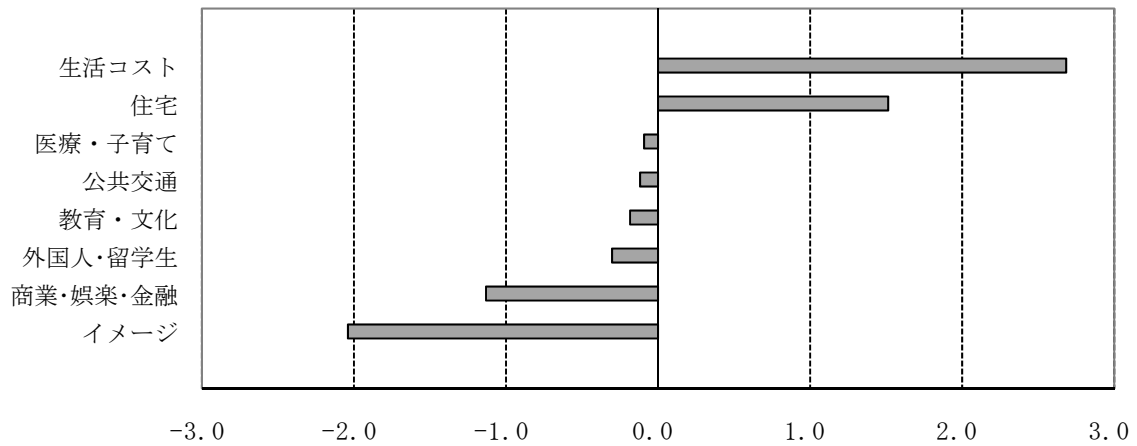


図6-34 1軸のカテゴリースコア（生活面）

【3軸の解釈】

カテゴリースコアの正の方向では、「商業・娯楽・金融」「外国人・留学生」が高い値を示しており、「都市機能」とする。一方、負の方向では、「イメージ」が突出しており、「都市イメージ」とする。

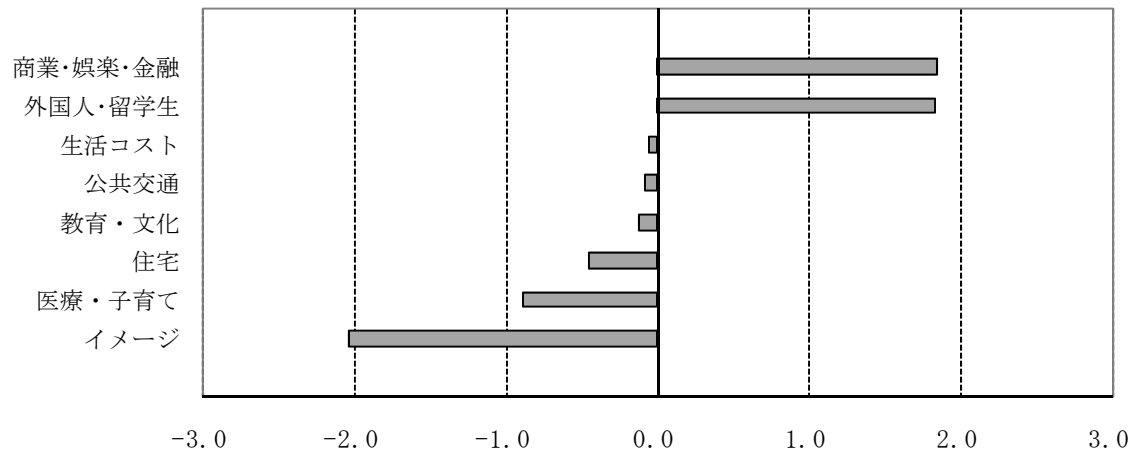


図6-35 3軸のカテゴリースコア（生活面）

以上より、リサーチパークの生活面において必要とされる機能や環境は、「生活コスト」「都会」「都市機能」「イメージ」の4つの成分に分類することができる。